

保育実践研究の報告

長谷川 武 弘 (お茶の水女子大学人間発達教育研究センター)

1. 本取り組みの概要

本報告は、チャイルド ケア アンド エデュケーション講座で開設している授業「保育実践研究」において、受講生が取り組んだ研究活動の報告である。本講座は現職保育関係者を対象に授業を開講している。その多くは講義形式で開講されるため、受講生が自ら課題に取り組む機会は少ない。そこで、現場などでの疑問・関心について自ら課題を設定し研究として掘り下げ、2年間かけてまとめていく作業を3名の講座教員(榊原・大戸・長谷川)が支援する授業として保育実践研究を開講している。受講生には他の授業のように受け身で講義を聴く姿勢ではなく、積極的に自身のテーマを掘り下げていく姿勢が求められるという特徴を有する授業である。本年度(平成21年度)は6名がそれぞれに研究テーマを決め、調査・実践を進めてきた。

2. 受講生の研究報告(一部途中経過報告)

子どもの身体機能と歌唱との関係について

田島 恵理

子供の身体の動きと音声との関係をとらえる第一歩として、日本保育学会第60～62回の発表論文集から関連研究を選び出し、研究課題の内容を分析した。ここで資料源として参照した研究は以下の5本である。

1. 小川由美「遊びから学習へのつながり—わらべうたの実践を通して—」
2. 尾見敦子「ハンガリーの幼稚園における音楽教育」
3. 志民 一成・今川 恭子「子どもの声と音楽的表現(7)歌唱教材開発」
4. 庄司康生・三瓶令子「保育者と幼児がともに『うたう』ことに関する考察」
5. 水野伸「幼児の音楽表現の指導—学びの体験—」

これら5つの研究に共通にみられた点を列記すれば以下のようなものである。

- (1) 歌唱表現を保育に取り入れることで、通常の言語活動とは違った表現力を持つ。
 - (2) 共感性が高まり感情や色々な動作が結びつき、豊かな表現力となる。
 - (3) 人間関係が円滑になる。
 - (4) 遊びに取り入れやすく、積み重ねることで、身体の動きに影響し、表現力を増す
- 声は息のリズムが音色化したもので、多くの民族で歌は言語より古い歴史を持つ。声は動物

や人間の身体に備わった交流手段であり、他者の注意をひきつけ、自分の存在をアピールする働きをもつ。発散、共通理解、気分転換、教養拡張、それだけでなく、体に必要な機能訓練にもなっている。大声を発声した後すっきりするように。声の調整は、直接的感情表現だけでなく、身体全体の集中的活動と言える。歌いながら動作することによって、連帯感や共同体験を促し、コミュニティ形成の重要な基礎となる「共通社会意識」を育む。その意味で、歌唱は子どもの身体機能の発育に重要な役割を果たしているといえる。

「気になる子」に対する保育者の関わりと意識の変化 **ICレコーダーによる保育現場の録音を通して** **菊池 綾**

＜目的＞近年、保育現場でよく耳にするようになった「気になる子ども」の存在。自園でも、「友達とよくトラブルになる」「集団の中でじっとしてられない」子どもが数名いる。本研究では、一人の子どもにスポットを当て、対象児と保育者、対象児と友達との関わりから、対象児の行動を振り返る。保育現場の音声をICレコーダーに録音し、記録してみる。その後、検討会を行い、園全体で気になるこどもに関わる意識をどう育てることができるか検討会の意義を考察した。

＜方法＞保育場面を録音し、ある場面を選出した。選出した場面をドキュメンテーションの形で、会話を文字化し、対象児に関わることがある保育者が、選出場面の録音を聞いた。聞いたものに対して、感想や評価、批判、提案などを討論してもらい、それを録音し記録した。討論されたものの中から、対象児に対して有効と思われるものを検討し、キーワードを選出した。上記の作業をもう一度行った。2回の検討会を通じて、参加した保育者の気持ちにどのような変化が生じたか、アンケートにより意識調査を行った。

＜考察とまとめ＞ICレコーダーによる音声録音は、日常の保育の中で、記憶に残らなかったり、保育者が主観的に理解していたりした子どもの言葉や保育者自身の言葉がけ・働きかけを、ありのまま記録することができる。また、今回の研究では、個人の振り返りだけではなく、その音声を検討会という形で、複数で聞いたことに意味があった。日頃の保育の中で、子どもとのやりとりにおいて、保育者は多数の子どもと関わっている。その言葉がけの質や量を検討する良い方法であると言える。検討会で出された意見の中から、いくつかキーワードを選出し、それを元に、次の保育場面を録音した。今回の検討会では、1つのキーワードを巡って、保育者同士、その見解が違っていたり、お互いの意見を聞いたりする良い機会となった。比較、検討がしやすいのも、この録音という方法の利点であると考えられる。

【問題と目的】

乳幼児保育の中で身の自立は常に成長発達の一つの目安となる。2歳児は、身体の発達や意識の向上からその自立が確立され始める時期といえる。中でも「着替え」は食事・睡眠・排泄と違い子ども自身の生理的欲求に基づくものではないが、一日の中で幾度となく通る課題としてあげられる。

昨年の夏、幼児クラスと合同で数日過ごしたところ、着替えに関して幼児たちに甘えて依存する2歳児の姿が多く見られた。その後着替えに対する意欲が薄れ、職員の手を必要とする部分が多くなっていた。そこで1歳児クラスと手をつないで散歩に出かけてみたところ、いつもはふざけてしまう子も小さい子の手を引いて意気揚々と歩く姿が見られた。そのように異年齢児と過ごすことで見られた2歳児のそれぞれの行動の変化に着目し、生活の場面を記録してみることで、より効果的な異年齢の関わりを通して2歳児保育を充実させるための手立てを探ることが出来るのではないかと考えた。

【対象と方法】

対象は、2歳児クラス11名のうち4名を中心にする。方法としては、固定のビデオカメラを1～2台設置し着替えの場面を捉えていった。時間帯は、食後に「着替え用マット」にきた時点から記録開始、着替えを終えた時点で終了とする。

【結果と考察】

・所要時間が10分以上かかっても、着替え自体は2～4分程で出来ていることがわかった。1歳児へは視線を向けていたが、直接的なやり取りはほとんどなく数字には表れなかった。4歳児からの手伝いが多いことがわかる。

I. 2歳児からの依頼は幼児ではなく保育士へ。

手伝いは全てやってあげようとする側からの働きかけによるものだった。これは保育士との接触が日常的であることと、2歳児側からは幼児にやってもらうという発想がなかったのではないかと考えられる。

II. 手伝ってもらうことを受け入れたくない気持ちの芽生え。

これは2歳児の発達に伴って、出来ることをやってもらうことへの恥じらいが生じているのではと推測された。

III. クラス内でも手伝おうとする姿。

調査後半には、同年齢でも他児を手伝おうとする姿が見られたが、手の貸し方がわからず、

手助けには至らなかった。これは幼児の中にも見られ、自分が出来る動作でも相手が着脱しやすいうように手を貸すことは思ったよりも高度な技術が必要と考えられた。

今回の調査記録では期間も短く定量的とは言えないが、着替えへの取り組みだけでなく2歳児が幼児の動きをじっと目で追う姿やそれを吸収し自らも模倣しようとする姿を捉えることが出来た。実際に手伝おうとすることは、幼児と過ごした経験があったからこそ生じた行動と考えられ異年齢児保育のメリットではないか。2歳児が、幼児とは「自分の成長の先にある、目標を与えてくれる存在」と認識し、これは年少児への接し方にもつながっていく有意義な経験であったと言える。また今回、やってもらうことを恥ずかしがるという2歳児の行動は予測していなかったが、情緒面での成長を実感できたことは収穫だった。

今後もクラス単位では得られ難い異年齢の関わりを持ち、お互いの経験の幅を広げていきたいと考える。年長児とは少し難しい課題に取り組む活動、また年少児とは自分達が自信を持って出来る場面など、それぞれの年齢の特性を活かしながら子どもの心身の成長発達に、より効果的と思われる場面作りをしていきたい。そして最後に保育士の役割として、異年齢の中で自尊心を大切にしながら子ども同士の関わりを促していく保育の必要性を強く感じた。

保育の中で気になる子どもについて—保育者の求める支援のあり方を考える— 東 智子

〈問題と目的〉本研究では実態調査を通して、「気になる子ども」に対し「保育者が実際に取り入れている支援方略」と「保育者が求めている支援方略」を検討することにより、保育者がどのような支援のあり方を求めているのかを明らかにする。

保育現場などでの支援のあり方については、コミュニティ心理学におけるコンサルテーションの理論に通じるものがある。キャプランによれば、コンサルテーションとはコンサルタントと、コンサルティと呼ばれる専門家同士の間で行なわれる相互活動である。

例えば、保育現場で直接クライアント（気になる子ども）を援助していくのはコンサルティ（保育者＝保育の専門家）であり、コンサルタント（心理の専門家）はコンサルティ（保育者）が該当児に応じた適切な指導に当たれるように、専門的な立場から助言をして援助する形をいう。

〈結果〉保育の中で「気になる子ども」に対する保育者の求める支援のあり方は、園全体で共通理解が図れていることをベースに以下の3点に集約できた。

- ① 専門家や地域の専門機関など外部機関との連携を図る。
- ② 専門の指導者に園にきてもらい、直接アドバイスを受ける。
- ③ 子どもとのかかわりあいや保護者の対応など、各ケースに応じた具体的な援助のあり方を

得る。

これらの結果から、内部の連携として園全体で共通理解を深めることをベースに、毎日の保育の中でコンサルティ（保育者）自身が抱え込んでいるさまざまな問題や葛藤が克服できるように、外部機関からの間接的な支援が求められていることが示された。また、その支援内容としては長期的な視点で発達を捉えた支援が受けられることと、その子を取り巻く集団をいかに育てるかといった視点による支援が、保育者の求める支援であると考えられる。

初回面接において、相談員が相談者の心情を理解することは、良好な相談関係を築くことにつながるか

奥田 葉子

障害の中でも、発達障害児を持つ保護者の「障害認知」は長い時間をかけて行われるものであり、「子どもの発達に応じて繰り返される」（野邑 2009）とも「慢性的悲哀」（中田 2009）ともいわれている。発達障害児を持つ保護者への継続的な支援は、今後の重要な課題であると考えられる。

発達障害児を持つ保護者との関わりを通して感じていることは、思い描いた通りの発達の道筋を通らないわが子との生活に悩み、また、自身の子どもが原因でおもちゃの取り合いが起きたり、泣き叫びや場にそぐわない言葉使いをするなど子どもの行動の特異性によって、周囲から度重なる非難のまなざしや批判の声にさらされ傷ついているということである。保健所等の健診や療育センターに相談をした経験があっても、相談関係を継続させることができないケースも多くみられた。いくつかの事例を検討している中で、初回の面接時に指摘や診断、または指導的な助言を受けると、保護者は「自分の大変さをわかってもらえなかった」とか「責められた」と感じ、その後の継続面接や療育をためらう傾向にあることがわかった。一方で、面接の初回及び最初期に、今までの大変さや辛さ・不安や悩みなどの感情を十分に聞いてもらえたという印象をもった保護者は、その後も継続的な関わりをしているケースがみられていた。今年度の研究では、援助者側の最初期における対応に焦点をあて、その後保護者が継続した面接関係を続けたいと思いついた過程に、職員の対応がどのように影響したのかを検討することにした。

「初回面接において、相談員が相談者の心情を理解することは、良好な相談関係を築くことにつながるか」という研究テーマで、1事例を対象に事例検討を行っている。今後は、初回に会った時の記録を分析し、並行して面接による聞き取り調査を行う予定である。

実体験が好奇心を育むのか ～保育実践から教材及び環境・保育・保育者の援助を考える～

市川 里美

乳幼児期の子供達は、保育者や友達と一緒に様々な経験を通して、驚いたり不思議さを感じたり、疑問を感じたことを一つ一つ試していき、自分なりの答えを見つけようとする。そこで得られた感動や納得したことを更に友達と伝え合ったり、より興味をもち、試行錯誤を繰り返す。保育園時代に様々な実体験をしたことで、私は実体験を重ねるということは、子どもの気付きや好奇心・子どもが遊びに向える力となるのではないだろうかと考えた。

本研究では、実体験をするにあたり、どのような教材・環境・保育者の援助が行われると子どもたちがより好奇心を抱くのかを実践記録をもとに検討した。記録を読み返すにあたり、本園で使用している指導計画書の項目にある「活動内容」「援助及び環境構成」を分析の視点とし、これに活動内容と関連の深い教材についての視点を加え、検討した。